

1 寺崎 幸季氏 岩手県 釜石市 灰色の住宅を彩るマグネットアート

Point ▶ 取組のポイント

[ヒト]

支えてくれた人に
恩返しを

[着眼点]

長時間を過ごす
仮設住宅に愛着を

[連携・協働]

周囲やNPO、
著名人の支援

[持続性]

仮設から街の装飾へ、
そして熊本との交流

Area ▶ エリア

岩手県釜石市

Player ▶ 取組主体

寺崎幸季氏

Project ▶ 取組の内容

マグネットアートを使った街の
装飾・交流

Profile ▶ 人物紹介

寺崎幸季 (てらさき ゆき)

釜石小学校6年生の時に被災、自宅は半壊し、避難所、仮設住宅で生活を送る。県立釜石高校生の時にプロジェクトを企画。高校生として周囲のサポートを受けながら、マグネットアート作品を全国から約1万3000枚(2017年11月取材時)を集めることに成功した。2017年春から、大学生としてまちづくりを学んでいる。

気持ちがこもった
アート作品で街に愛着を

[ヒト]

支えてくれた人に
恩返しを

「マグネットぬりえプロジェクト」を発案、推進した寺崎幸季さんが震災に遭遇したのは、小学校6年生の時だった。自宅は津波で半壊。地震直後に高台から津波にのみ込まれる街の様子を目の当たりにした衝撃から、PTSD(心的外傷後ストレス障害)を発症した。避難所で辛い毎日を送っていた寺崎さんは、たくさんの温かい心に元気づけられた。

卒業式は目前だったが、釜石小学校の体育館には自宅に帰れない多くの人々が避難している。だが、そんな人たちが「子どもたちのために」と、体育館を空けてくれた。そのおかげで卒業式を迎えられたことが、いまでも大切な思い

出になっている。卒業式は予定より18日遅れの4月5日、多くの卒業生はジャージ姿だったが、周囲の温かい心遣いが何よりの祝福だった。

大ファンだったお笑いコンビ、ノンススタイルの存在も大きかった。避難所でやっと携帯電話が使えるようになった時、ノンススタイルの石田明さんのブログを見ると、「辛い時にクスッとでもしてもらえたら」と、毎日のようにネタを公開していた。「あこがれの人が応援してくれていると思うとうれしくて、心の支えになりました」と、寺崎さん。

人々のやさしさに触れた寺崎さんは、自分も地域に恩返しをしようと思うようになる。中学2年生になると、自身でも大好きなお笑いのライブを企画。吉本興業からの協力を取り付けて、お笑い芸人を派遣してもらい、避難所だった体育館で開催した。招待したのはも



① アートに取り組む寺崎さん ②③ お笑い芸人ノンススタイルのおふたりが作成したマグネット

寺崎幸季さんは高校生の時、当時住んでいた仮設住宅の灰色の外壁をマグネットシートにハートマークをあしらったマグネットアートで彩ろうと、「マグネットぬりえプロジェクト」をスタートさせた。その取り組みは釜石の街へ、他の被災地との交流へと、広がりを見せている。

もちろん、卒業式の時、避難所を空けてくれた人たちだった。

県立釜石高校に進学した2014年夏には、官民パートナーシップ「TOMODACHIイニシアチブ」のサマー・プログラムに参加した。公益財団法人米日カウンシルと在日アメリカ大使館などが主催、次世代リーダー育成のため、被災地の高校生たちがアメリカで地域貢献やリーダーシップについて学ぶプログラムだ。

帰国後は、子どもたちにキャリア学習などを提供する認定NPO法人カタリバが開いた「全国高校生『鎌倉』カイギ〜高校生が町のために何かしたっていいじゃないか〜」に参加した。地域の課題や解決策について、考えたかったからだ。

こうした被災地の高校生を支援するプログラムへの参加を通じて、被災地で地域貢献に取り組む他の高校生たちと知り合い、触発されて「自分も高校生として地元の釜石の課題を解決するために何か貢献をしたい」と思いをめぐらすようになった。

[着眼点]

時間を過ごす 長 仮設住宅に 愛着を

日々の生活のなかで、寺崎さんが抱いたのは「中学・高校時代という大切な時期を過ごしたにもかかわらず、仮設住宅を『家』と実感できないのはなぜだろう」という疑問だった。

「私にとっての家は震災前の家。仮設住宅は『カセツ』と、寺崎さんの友人も話している。

そして、「昔の家に強い愛着があるのは当たり前だけれども、仮設住宅が家として愛着を持たれないこと自体が大きな課題ではないか」と気が付いた。

大人にとっても3年間は長いかもしれないが、子どもにとっての3年間は、もっと長い。その期間を『カセツ』で過ごし続けるのは寂しい。仮設住宅にも愛

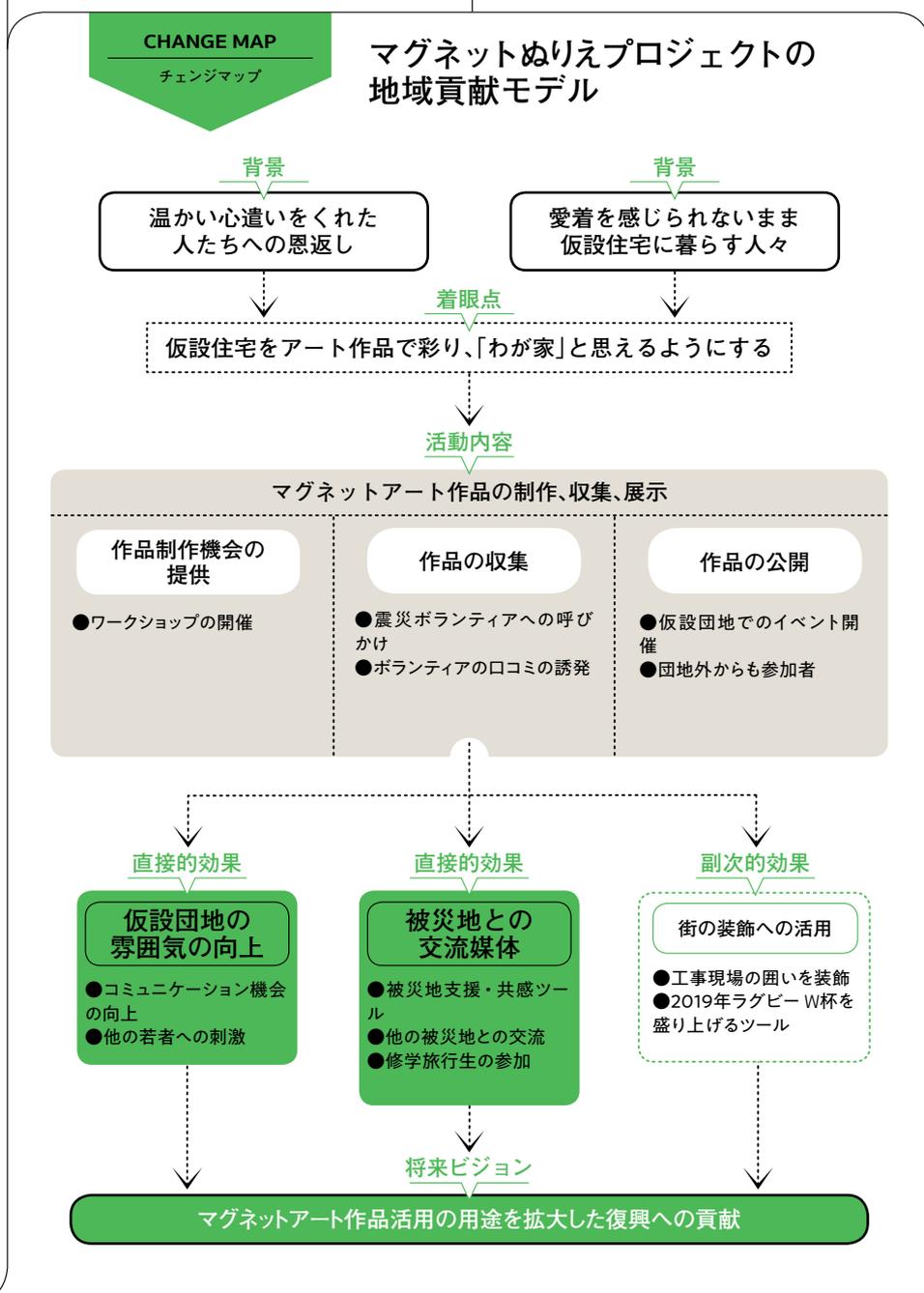
着が持てるようにしたいという思いから、発案したのが「マグネットぬりえプロジェクト」だった。

このプロジェクトは、震災直後から被災地でアートを通じた被災者支援活動を展開している、現代美術家で東京藝術大学教授の日比野克彦氏の取り組みからヒントを得た。マグネットシートにカラフルなハートをあしらった「マグネットアート」を被災者や被災地を支援したい人たちに作ってもらい、仮設住宅のプレハブ長屋の味気ない灰色の外壁を明る

くしようというものだ。

「住民のみんなで作れば、コミュニケーションの機会にもなるはずです。それに、学校の美術の時間に何時間もかけて描いたり、作ったりした作品には愛着が生まれませんか。だから、アートは愛着を持ってもらうには良い方法だと思います」と、寺崎さんは話す。

ちょうど、寺崎さんが住む昭和園の仮設住宅(中妻町仮設団地)は、仮設住宅の集約に伴って、市内で最初に取り壊されることが決まっていた。簡単に



はがせるマグネットアートなら、取り壊されても、次の場所に生かすこともできるはずだと考えた。

高校生会議の場で発表したこの提案は決勝に残り、高い評価を受けた。自信を深めた寺崎さんは、地域貢献の思いを込めてプロジェクトを始動した。

[連携・協働]

周囲やNPO、著名人の支援

寺崎さんの提案は、社会起業支援NPOの一般社団法人アショカ・ジャパンからも認められ、2014年11月、寺崎さ

んは「アショカ東北ユースベンチャー」のベンチャラーのひとりに選ばれ、1年間の活動資金も受け取ることができた。

だが当初、寺崎さんはさすがに、プレッシャーを感じながら思い悩んでいた。「ひとりの高校生が、たくさんのマグネットアートを集めるなんて、無理ではないだろうか。どうしたら集められるのだろう……。」

そこでまず、日比野氏とのコンタクトを試みた。しかし相手は全国を飛び回る著名なアーティストで、なかなか連絡がとれない。途方に暮れていた時に、手を差し伸べてくれたのが地域の大人たちだった。釜石市で、地域のために立ち上がる人々の支援活動をする一般

社団法人三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡代表理事から、東北を訪れていた日比野氏を紹介された。

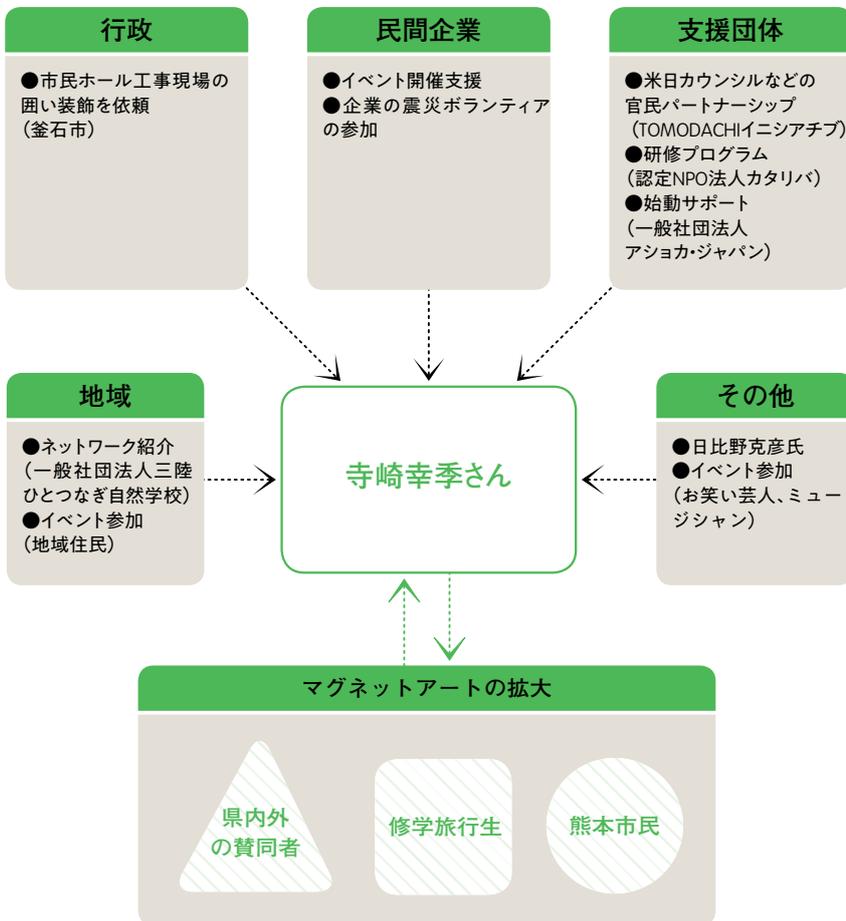
2015年5月に、寺崎さんは忙しい日比野氏と15分ほど、面会する機会を得た。短い時間のなかで、プロジェクトのこと、それをやりたい理由などを懸命に訴えると、日比野氏も「一緒にやりましょう」と支援を快諾。さらに日比野氏から紹介されたマグネットシートのメーカーは、マグネットシートの提供も申し出てくれた。

ここからプロジェクトは一気に進んだ。8月には仙台市のイベント会場で、マグネットアートのワークショップを開催。参加者に、思い思いのハートをデザインしたシールをあしらった10センチ四方のマグネットシートを作ってもらうことができ、1,000枚ほどが集まった。

さらに、三陸ひとつなぎ自然学校を訪れていた、大学生や社会人のボランティアからも協力を得ることができた。

COLLECTIVE IMPACT
コレクティブ・インパクト

マグネットぬりえプロジェクトの連携・協働の図





しかも、そのボランティアたちが地元や会社に戻った後、気軽にできる被災地支援として周りの人に呼びかけてくれたことで、マグネットアート作りの輪は全国に拡大した。SNSでの呼びかけもあって、その年の9月までに計約6,000枚のマグネットアートが全国各地から寄せられた。

そして9月20日には、寺崎さんが住んでいた昭和園の仮設住宅で、日比野氏のほか、共感したミュージシャンら、多くの人のサポートでイベントが開かれた。子どもからお年寄りまで、多くの住民にマグネットアートを作ってもらい、全国から届いた作品と合わせて、仮設住宅の外壁にマグネットアートをパッチワークのように貼って飾り付けていく。当日は東京など遠方からもわざわざ足を運んで参加してくれた人がいて、食品会社からはイベント時の炊き出し支援の申し出もあった。プロジェクトは大成功だった。

[持続性]

仮設から街の 装飾へ、そして 熊本との交流

プロジェクトは仮設住宅にとどまらず、街を彩るかたちで発展していく。

2016年3月には釜石市からの依頼で、市民ホールの工事現場を囲む白い安全鋼板をマグネットアートで彩るプロジェクトを実施した。さらに多くのマグネットアートを集めて、貼り付け当日はお笑い芸人やミュージシャンなどと、大きなイベントを開いた。

2017年3月には、熊本市現代美術館で開かれた「3.11→4.14-16 アート・建築・デザインでつながる東北⇄熊本」展に、マグネットアートが展示された。日比野氏が手がける被災地支援の全国的なプロジェクト「ハートマーク・ビューイン

グ」の一例として、アートの展示が実現したのだ。仙台と釜石で作られたマグネットアートと、熊本で作ったマグネットアートが交換されて、被災地同士で心を交わすツールにもなった。

寺崎さんは、「高校生だから地域に貢献するのは無理なのではなく、高校生だからできることもあると思いました」と振り返っている。

一連のプロジェクトは、地元の復興に貢献したいという思いを抱く、他の若者へのエールにもなるはずだ。

2017年春、寺崎さんは首都圏の大学の1年生になり、実家の釜石市の仮設住宅を離れた。寺崎さんが釜石を離れた後も、東北を訪れた中学・高校の修学旅行生がマグネットアートを作成してくれている。修学旅行生の学校が東京にある場合は、寺崎さんが後日、学校に講演に出向くこともある。

故郷を離れても、寺崎さんのプロジェクトは終わらない。



① 釜石昭和園仮設住宅に日比野克彦さんとマグネットを貼る様子 ② 支援者のみなさんと記念撮影